

奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民投句

一般の部



令和四年十二月度 入賞句一覽 投句数 五百九十二句

特選

田中 青志 選

心にも裏と表や枯蓮

揖斐郡大野町 藤田 涼子

枯れた植物のさまざまなものが季語として取り上げられているが、その中でも最も荒涼たる感じを与えられるものがこの枯蓮、裏も表も判然としない形で枯果てている。裏も表もないという風情から、人の心の裏表に思いを馳せるのも、これ詩人の心。裏も表もある。人の心にそうあつてはならないと自省の念も込めて書いている。自然に教えられることの多い人の世の在り方である。

蹲に立冬の水ぴんと張る

愛知県西尾市 金子 恵美

「水がぴんと張る」は、冬到来の寒さに敏感な水の表情をうまく表現している。ひよつとしたら、薄氷の張るのを思わせる雰囲気である。身も心もぴんと張らせる、冬到来の朝の緊張感を巧みに表現できている一句。

無住寺の庭の一隅石露の花

大垣市 大杉 すみゑ

一隅を照らすということばがある。一角を明るくするという意味もある。どちらかと言えば、ぱつとしない一隅をクローズアップするがごとく明るくしている。明るくするのがこの石露の花の存在感でもあり、そのためにこの世に存在するのが石露の花という植物の使命なのかもしれない。

秀逸

短日のたそがれ刻の鳩時計

岐阜市 伊藤 英司

柿の里どの道ゆくも柿たわわ

大垣市 大杉 すみゑ

初鴨や入江に朽ちし舟一つ

大垣市 立川 昌子

冬うらら麒麟首より歩き出す

大垣市 村田 通夫

実南天ひとつひとつに雨の粒

大垣市 尾関 逸子

天を突くメタセコイヤ鳥渡る

大垣市 新町 恵子

侘助や茶室に釜の滾る音

神奈川県川崎市 立野 音思

入相の音色ぬらせり初しぐれ

大垣市 森 茂寿

大空をどよもす鶴の渡りかな

福岡県福岡市 大津 英世

棒銀の一つ覚えや小六月

滋賀県大津市 近江 堇花

入選

一と隅は暮色とならず石露の花

養老郡養老町

田中 紫香

さざんかや今も着ている赤い色

東京都北区

菱沼 多美子

懐妊は千代の福音小鳥来る

岐阜市

堀江 美州

山里の音一つ無き小春かな

大垣市

水谷 義雄

冬薔薇母に気概のやうなもの

東京都新宿区

花澤 ちいこ

立冬や庭師の缺さえ渡る

大垣市

香田 末代

石露の花水の流れの新しく

大垣市

小林 研

錦秋の伊吹にかかる雲一朶

大垣市

久保田 悟義

真つ直ぐに光と影の冬木道

愛知県名古屋市長屋市

舘野 茂子

シクラメン求むやあれもいいこれもいい

揖斐郡大野町

藤田 涼子

冬夕焼雲にのこして山暮るる

大垣市

坪井 克枝

母の背のますます丸く寒に入る

養老郡養老町

山田 順子

全身で手を振る女将秋日和

養老郡養老町

佐藤 咲楽

草むらに赤くいろづく冬苺

大垣市

石垣 珠泉

校長の長き訓示や鰯雲

埼玉県東松山市

谷本 ダツク

毛糸編むきつと死ぬまで好きな色

愛知県西尾市

金子 恵美

揉みあへるスクラム息の白さかな

愛知県豊田市

城山 悠水

ふりしきる落葉のひかる樹木葬

長野県下伊那郡

長沼 まさし

犬を曳く落葉の音を連れながら

神奈川県横浜市

龍野 ひろし

鳥渡るベンチに知らぬ者同志

東京都世田谷区

関戸 信治

一般の部

選者吟

山に雪来しこと今朝の挨拶は

青 志

